審査の結果の要旨

氏名　山口　毅

本論文は、対面的相互行為場面で生起する「見えにくく曖昧な排除」の問題に注目し、その問題をいかに理論的にとらえ直すことが必要か／可能かを、突きつめて考察した研究である。

山口氏は、大きく分けて二つの作業を本論文の中で行っている。一つは、アメリカの社会学者、Ｅ・ゴフマンの議論を読みなおした視点から、近年流行しているアイデンティティ・ポリティックス論による分析がもつ限界を明らかにする、という作業である。すなわち、各種のマイノリティの解放運動に発する、被差別集団カテゴリーに依拠した議論では、カテゴリーを用いないでなされる「見えにくく曖昧な排除」を批判できない（第２部）。また、近年、社会学の分野で進められている、スティグマの介在する相互行為の分析では、表面上事件が生じない「見せかけの受容」を問題化できない（第３部）。

むしろ、アイデンティティ・ポリティックスの論者からは「時代遅れ」とみなされているＥ・ゴフマンの議論にこそ、説得的な分析を見出すことができると山口は考える。被差別集団カテゴリーが用いられず、表面上リベラルな受容が存在する相互行為において、にもかかわらず排除が生じてしまうメカニズムを、ゴフマンは描き出しているとみている。

しかし、ゴフマンの議論にも問題がある。その合意論的で決定論的な理論構成の結果、排除の現実を記述することが、相互作用の組み換えの実践的可能性を封じてしまうという点である。それは、構築主義的社会問題論と同型の問題である（第３章・第 10 章）。

そこで、山口氏は、本論文の後半で、もう一つの作業を行っている。Ｃ・ムフのラディカル・デモクラシーの視点を導入するとともに、Ｐ・コロミー＆Ｊ・Ｄ・ブラウンの「相互行為シティズンシップ」の概念に着目し、「ラディカル・デモクラシーの相互行為シティズンシップ」という視点を立て、「見せかけの受容」が発生している相互行為の組み換えの可能性を提示している。ゴフマンの議論が合意論的なリベラル・デモクラシーの前提をもっているのに対して、葛藤論的な理論枠組みを提示することで、相互行為と解釈との別の循環過程の可能性を示したのである。

本論文の意義は、対面的相互行為場面における排除の問題を考える上で、ゴフマンの議論がもつ理論的重要性を明らかにしたと同時に、そのゴフマンの限界を乗り越える一つの可能性を提示した点にある。あからさまな差別ではなく見えにくい差別・排除に、固定した差別ではなく流動的で機会主義的な差別・排除に変容しつつある現代の差別「承認」問題を考える上で、重要な理論的貢献であるといえる。本論文中では、いじめ、帰国子女、学校におけるジェンダーなど、教育に関わるさまざまな主題についても論及されており、抽象度の高い議論が、教育学の研究に対しても十分な含意をもっていることが示されている。このような観点から、本論文は博士（教育学）の論文として十分な水準に達しているものと認められる。